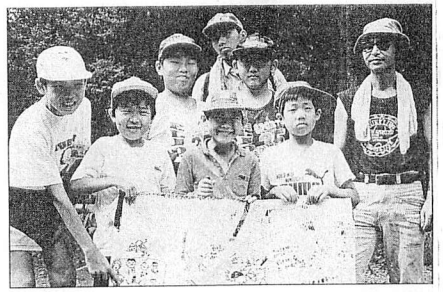
子どもたちの自然体験塾が好評

異年齢集団が触れ合って 四季折々の原体験づくり

ルポライター
滝川康治

環境学習を進めようという試みが、各地で盛んになっている。旭川市内では、自然保護団体などの手で長年にわたる体験塾の取り組みが続いてきた。野山の探検や雪中キャンプ、サケの飼育、農園づくり…などと、活動内容は多彩だ。全国的にも珍しい体験塾の営みの一端を紹介する。



嵐山公園で冬の魅力満喫

二月中旬のある日、グリーン・フォーラム旭川（GFA）の子どもたちとその父母ら六十人ほどが、旭川市郊外の嵐山公園の一角で冬の自然体験教室を開いていた。

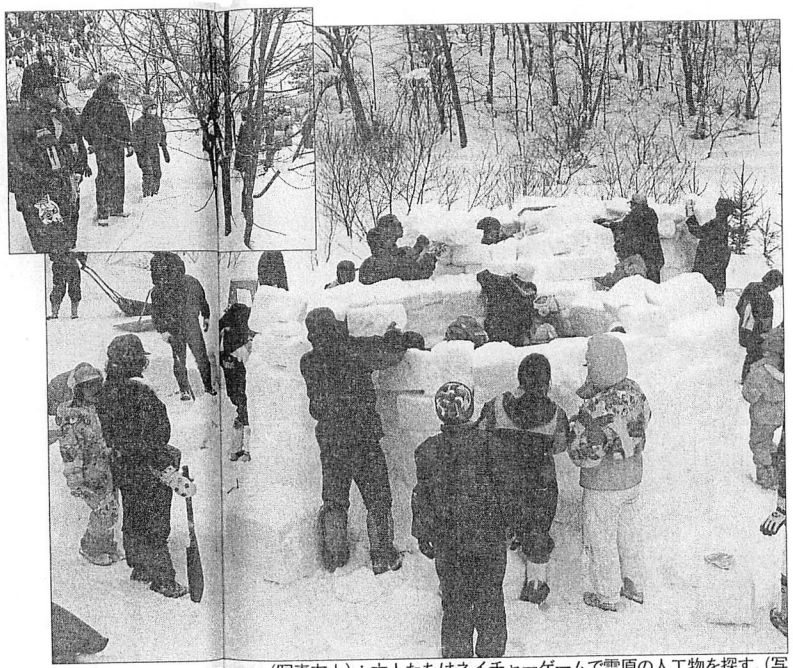
GFAの冬の教室のメインは、イヌイットの住居・イグルーを自分たちで造り、その中で寝泊まりしてみることである。教室を主催する大雪と石狩の自然を守る会（寺島一男代表）の会員たちのアドバイスを受けながら、子どもたちは踏み固めた雪を切り出し、半球型のイグルーに造りあげていく。実際に泊まるのは半月ほど後だという。

三十人ほどの大人たちは、冬の自然をテーマにしたゲームを学ぶ。取材に訪れたわたしも、その輪に加わった。この日のコーディネーター役は、札幌市市内で環境教育事務所を主宰する丸山博子さん。ネイチャーゲームの手法や理念に触れながら、自然体験がなぜ重要なのかを肌で学ぶことが目的だ。

参加者が二列に分かれて手をつなぎ、両端の人がハヤブサと獲物のウサギ役に、途中の人たちはハヤブサの神経や翼、足、爪などの部位になった。「獲物を捕れ！」と、ハヤブサ役が手を握って信号を伝え、どっちが速くウサギ役に到達するかを競う。

二十メートルほどの雪原コースの周りの木立などに、洗濯バサミや手袋、歯ブラシなどがさりげなく置かれている。そうした人工物がいくつあるのかを探すのだが、これがなかなか見つからない。「真っ白カモフラージュ」というゲームだった。最後は、童謡「雪やこんこ」のメロディーで一人ひとりが替え歌を作詞して締めくくったが、なかには〝名作〟もあった。

「自然の中にいると素直に表現できるので、最後に必ずこの作詞をやるんです。ハヤブサのゲームは、全神経を研ぎ澄ます感覚を大切にしたい、と思って企画した。ネイチャーゲームは、人によって、季節によって、感じ方が全く違う。本物の自然体験のステップとして位置づけられると思います」



（写真左上）：大人たちはネイチャーゲームで雪原の人工物を探す。（写真右下）：切り出した雪の塊でイグルーを造る「グリーン・フォーラム旭川」の子どもたち（嵐山公園で）

終了後のミーティングの中で、丸山さんがゲームの意味をこう解説した。

配られた質問表の回答を題材にした話し合いも行なわれ、和やかな雰囲気でゲームを通じた自然体験のひとときが過ぎていく。その間にも、切り出した雪の塊が積み重ねられてイグルーが出来上がっていった。

遊びを大切に通年の活動

小学生のための自然体験塾・GFAの前身は、一九七五年に守る会が開設した「ちびっこ探検学校」である。当時は、自然保護パワーによって大雪縦貫道路計画が中止になり、大雪山の自然を守る幅広い活動を模索していた。

「子どもたちを中心に据えることで、将来の自然保護にも光が見えるのではないか」――まず大雪山や石狩川の自然の中に飛び込み、楽しさを実感してもらう企画を組んだ。決して、子どもたちに自然保護運動をさせようと、といった狭い了見ではなかった。探検学校は、二泊三日で年一回、近郊の開拓跡地や廃校をベースに行なわれて、慣れないキャンプに悪戦苦闘した子や父母らには好評だった、という。

年一回の活動から発展してGFAが誕生したのは八一年のことで、活動エリアも山から海へ、身近な自然から森林の奥深くへと拡がっていく。十年ほど前からは、花、動物、川、森などをテーマにして、ほぼ通年の体験塾が開かれるようになり、会員が二百人を超えた年もあった。現在は、百十人ほどが会員に登録していて、年間十講座が行なわれる。毎年三月、新聞記事や口コミを通じて募集するが、親の思いから入会させるケースもあるので、最後まで参加する子は六割前後になるらしい。

訪れる場所は、旭川市内とその近郊である。九五年度の野外活動は、十人くらいずつのグループで市内伊納の山奥に入り、山菜採りをして天ぷらやおひたしにすることから始まった。嵐山公園での夜中の登山などに続いて、夏休みには二泊三日のキャンプをする。

「自分のことは自分でやり、自分で食える――自然の中で生活できることが一番尊い。食べることについて、大人は指導はするけど手伝わない。水を入れないで炊く子、お粥になってしまう子もいる。行事は少なく、朝飯を作って、弁当持参で渓流上りを二キロくらいやって、釣りや川泳ぎをして帰って晩飯の準備、そして夜は物語大会――という感じかな。子どもは楽しいけれど、我々スタッフは大変ですよ」

大学生の息子が小三のころ、心配でついて行ったのがきっかけでGFAの活動にのめりこんでしまった、運営責任者の鎌田明徳さんは、こう言ってキャンプの様子を紹介する。

秋は軽装で行く登山と山の実採り、実りの秋に感謝する催し、そして冬になると後述するサケの飼育、雪中キャンプへと続く。夏場の多いときは九十人ほどの子どもが参加するという。中学生・大学生の希望者はリーダーとし

て登録され、特別講座でキャンプをやったりする。近年、夏休みなどに教育委員会などが野外活動を企画するケースが増えているが、二十年以上にわたって大がかりに体験塾を継続しているところは全国的にも珍しい。

遊びの中で得るものを大切にしていて、子どもたちにはスケジュールを強制しない。夏場はスタッフが穴堀りをして便所を作るところから始まる。

「エキノコックス病の対策をどうするか?」と議論したこともあるが、北海道で暮らす以上、逃げてはいられない。山の水を使うという結論になった。キャンプの最終日、飯盒で二合の米を炊く。残りを自宅に持ち帰り、親に〝成果〟を見てもらうのも特色である。

「GFAの子は学校の子と違う――と父親に言った子がいた。その話を聞いた教師が腕組みをして考え込んでしまった。現場の教師も自分たちの限界を感じているんだろうな」

学校教育のひずみを感じさせるエピソードを、鎌田さんが教えてくれた。学校では知育偏重、地域にはガキ大将はおらず、家に帰るとファミコンに浸る――そんな環境では、異年齢集団が肌で触れあえる機会が本当に少ない。ゆがんだ大人の社会が子どもたちの環境を蝕んでいる。そうした風潮の中で異年齢の子どもと大人たちとの共同作業で体験塾をつづけるGFAは、貴重な環境教育の場といえるだろう。

サケの帰る石狩川が願い

GFAの「川の学校」が発展したのが、冬の間に卵をふ化させて、三月下旬に放流するまで育てる「サケ・ゼミナール」である。今シーズンは、真狩村にあるふ化場(千歳川水系)から五千粒の発眼卵の提供を受けて、GFAの家庭や市内の小学校など三十カ所でサケの稚魚を育てている。

八三年から始まったサケ・ゼミの前史は、山陽国策パルプ工場による石狩川の水銀汚染問題にまでさかのぼる。七〇年代半ば、新潟大学の研究者が採取した市内の石狩川の底質土から高濃度の水銀を検出したのがきっかけで社会問題化し、市民団体が結成されて工場や道、環境庁と交渉が持つなど、反公害運動が大きく盛り上がった。

失われた石狩川の自然のロマンの担い手は、サケをおいてない。なんとか稚魚を放流して、ホッチャレ一匹でもいいから旭橋まで帰ってくれれば、人々の心にロマンの灯火が燃え上がり、多くの市民が石狩川の浄化に力を注ぐのようになるのではないか――。

こう考えた市民団体の人たちは発眼卵を求めて道内各地を奔走するが、水産庁の出先は官僚的で、「サケは国の魚だから…」と卵を分けてくれない。そこに現れた助っ人が十勝の幕別町ふるさと館だった。ここでは、水産庁を相手にせず、沖どりをしている網元に頼んでサケを手に入れて、生きたまま水槽に運んで産卵・ふ化させていた。念願のサケの飼育は八三年秋、同館から発眼卵の提供を受けることで、ようやく実現にこぎつけたのである。

それから十数年の歳月が流れ、サケの飼育はすっかり定着した。ゼミは、十二月初めに提供を受けた発眼卵を配付し、一月から二月にかけて水の取り替え方やエサのやり方、放流前の注意事項などを勉強しあう。そして三月下旬、旭川アイヌ協議会とチカップニアイヌ文化保存会の人たちにサケの無事を祈るカムイノミをしてもらいつつ、秋月橋のたもとから稚魚を放流する。

「何年もサケの飼育を続けて病みつきになった人もいるんですよ。守る会から卵が行っているのが四校、ゼミに参加してくる小学校が三校あって、育て方の助言は私たちがやっている」

と話すのは、サケ・ゼミ運営責任者の関口隆嗣さんである。育て方のノウハウに乏しい教育委員会のあり方を疑問視して、「生命誕生の神秘といった言葉は美しいけど、稚魚を放しっぱなしの教育じゃ不十分ではないか。それで終わってしまうなら、子どもたちはどう思うか。三~四年後にサケが帰ってこられる環境を考えるようにしないと、自然復活の一歩にならない」と、口調に熱がこもる。

「サケ・ゼミナール」の締めくくりは石狩川への稚魚の放流だ

「石狩川下流の深川市に花園頭首工という魚道のないダムがあって、(市内には)サケが一匹もいません。一年でも早くダムをなくしてください。昔のようにサケがのぼってくる川に――」

十一年前、GFA会員の小五の女の子が横路前知事にこんな手紙を出した。この子の自宅に道の担当職員が、「あと少し我慢してほしい」と説明に訪れたことがあった。

昭和三十年代、旭川市から十五キロほど下流に花園頭首工(農業用のダム)設置されて以来、市内へのサケ・マスの遡上がぴたりと止まった。落差が六~七メートルもある上に、魚道がないためだ。サケ・ゼミが稚魚の放流を続けてきたのは、このダムの一日も早い撤去を願う気持ちが底流にある。

その花園頭首工が、ここ数年のうちに撤去される見通しとなった。八七年に魚道付きの北空知頭首工が上流に完成したのに加えて、九四年には石狩川が建設省の「魚がのぼりやすい川づくり推進モデル事業」の指定を受けたことも、撤去計画に弾みをつけた。

堰やダムなどの河川横断施設について、施設とその周辺の改良や魚道の設置などにより魚類の遡上環境の改善を推進する――というのが同事業の目的。河川管理者の石狩川開発建設部は九四年、研究者や札幌・旭川両市、行政機関などの代表二十一人で構成する検討委員会を設置して、構造物や魚の棲息状況を把握する作業を進めている。

事業の具体化はこれからだが、石狩川開建では、「委員会の中で花園頭首工についても検討が行なわれており、『サケを遡上させたい』という市民の意向も反映させている。現在、撤去の手法などを検討中で、ここ数年のうちに(撤去が)完了できるだろう」(今日出人計画課長)と、説明する。

石狩川にサケを呼び戻す運動の努力が実り、ようやく夢がかなう見通しが出てきた。原点となった水銀汚染問題から二十年、環境問題をめぐる時代の流れは、開発一辺倒の行政をも少しずつ揺り動かしている。

北の大地から地球人を!

旭川市内の大学などで環境に関する講座を担当する一方で、「アーシアン(地球人)・クラブ旭川」(ECA)と、北方環境教育センターの二つの民間団体を主宰する三浦國彦さんは、環境教育をライフワークにしている。

中学校の教員歴が長く、前出のGFAの育ての親でもあった三浦さんが、「北の大地から地球へ!」を合言葉にした自然体験塾・ECAを設立したのは五年前のことだ。教育機関や自然保護団体などの後援がなくても、自然体験をさせたいと願う親や野外活動の経験者が何人かいれば、どこででも市民レベルの実践が可能なことを証明できるのではないか――そんなことを夢見て始めたのだった。

野鳥の飛来地に出かけてバードウオッチングをするECAの子ども

ECAは、親そのものが会員になり、家族ぐるみで活動に参加して、「自然遊泳」と銘打った月一回の体験プログラムが、二年単位で行なわれていく。参加家族のネットワークをもとに、

①東川町内の知り合いの農家の畑を借りて「ECAファーム」と名付け、ニンジンやジャガイモなどの根菜類を中心に、みんなで農作業に汗を流す

②冬場はサケの飼育に力を入れる

③植林や樹木の手入れなどを通じて森林への関心を高める

④再生紙の利用やゴミの減量、合成洗剤の不買などの環境浄化活動を実践してみる

といったプログラムを設定しているのが特色だ。現在は、六十二家族が会員になっており、子どもだけでも百人ほどが参加する。〝遊泳〟の舞台は、市内や近隣の町、富良野の東大演習林、焼尻島などと幅広い。

「同じ季節を二回体験させることで、子どもの成長と季節の変化とを重ね合わせられる。〝自然遊泳〟の前に親子一